物學和歌式
讀方
初寄
一

凡和歌乃讀方を教へ給ふ
腦式等世に流布せる多し
此ものゝ雅兒乃初学を遍く窺ひ
元乃をゝ乃おゝ握翫せるを古
賢の庭訓濱千鳥治ある物こゝ
沖津玉藻乃ゝ生さいな似り乃諸
抄を秘華し師説等ゆ書へて全
部七冊初学和歌式と号本より

初学和歌式

童蒙乃助もとしこの為おきしいこと
ありさまにて思ふ人乃なかけを
をえむとや
うるはしきのとや

初学和歌式目録

○一巻

一歌と可仮名事
一歌乃仮名と除く可入事
一一字歌といふ事
一弦歌といふ事
一歌とうらら可演事
一歌と初五文字乃出し次事
一歌とまいもとといふ事
一歌と忘れて演事
一歌とか流乃ゆづりて演事
一歌とか弄乃ゆづりて演事
一歌と賞玩とべき事
一歌のゆづりといふ事

○五巻

一か弄とりやうの事
一返弄乃事
一兼歌弄為賀の弄
演やうの事
一和弄歌の事
一和弄学問の事
一弄と演べき仏法の事
一弄と演る跡の事
一和弄乃初の事

○自五巻至七巻
三代集詞寄

一歌を上下にとる事
一雑歌乃事
一廻文の歌の事
一俳歌乃事
一片歌の事
一落歌乃事
一おもしろく讀れぬ歌のこと
一實字のこと
一虚字のこと
○自二巻 至六巻
一歌よむ心持 并 四季恋雑乃歌讀方のこと
一名所の哥讀やうのこと
○七巻
一和哥詞諸抄註釋拔萃

初学和哥式　巻一

題之讀方

○歌を詠んとする事

歌をよまんとならハ先歌乃文字に心得あり　虚字あり實字あり〈實字虚字のこと委しく末に出し侍り〉或ハ歌乃心を一首のうちにあらハして讀歌ありまたハしておもしろき歌あり〈讀方ハ部にあり〉或其歌によるへき所あり不知哉乃ことあり〈名所の部にあり〉各心をつくへし自然の名所によみ方ある事ハ此心の功者になるへしこれを主のこととして

○歌よむ心を得べく可入事

一 歌よむこころをふかくいれてとはことに〈和歌抄ノ秘抄之抄〉云読にハかぎりなく久しきこれをいれ心にまかせてあれく深くしねようしとこころハ今はよくて花をおもしろく家路を忘れておもしろからんごとく其趣をよろしとふかく讀へし

祝　君が代は八千代もさらし天乃とやいつの月日のかぎりなるらん　新古今　俊成

花　しらぬ川吉　千載　通親

さりとてむかしよりかゝる例なきにはあらずして地とは[illegible]

暁　　月　　　素暹法師

有明に向ひ人ありける歌の残りたる[illegible]

うやうのんと無ハいづれもあさかりぬなれバ暁月ニ云

一悦目抄 基俊作 云深雲なしといふ歌を初てあらしよりあらむ

名をうかべしてぬきとて有ぐてしともうれをげてなど

ありさまよさをへ暁ふんハいとやさしかるべし無常懐の

歌よりやうのをおもひあるべしこれはなにぞとかへてまつりき

むかしとて云是深雲といふ歌をもて思ひあからぬも風情

もなく物にあらハしてかなきとよろハおのがむきくれく

てなにのはかどころもあられがし然れどもその歌あはれなりと云

一庭訓抄 為世作 云暁月とあらん歌を暁月とよみたらんハよろし

くありいふにも横雲などの絶有明なしとあるべし

て可詠夕の字又は秋の横雲のたてなどと読べし自

然にして無べしと云これ又歌によみならひはのの

とて暁月とある歌にハ此月ともよむハありがたし其歌

[illegible]して[illegible]の大隠逸あり[illegible]とあらん歌に

ともなげにさく[illegible]とひとつなり[illegible]あかつきの[illegible]

[illegible]それを有明の月横雲なとといへば有明横雲の

[illegible]て又題にも[illegible]されど暁月といひても一

[illegible]夕の[illegible]入[illegible]名別の事也　引用

暁更時雨　　千載集　　　　長谷[illegible]

ひとり寝の[illegible]や[illegible]有明の月

月　　　　續古今集　　　　俊恵

いそのの時[illegible]花の[illegible]あり

暁霞　　　延文百首　　　　家隆

[illegible]の[illegible]河[illegible]

夕花　　　[illegible]七百首　　　為教

花[illegible]河[illegible]入[illegible]

秋夕雲　　白河殿七百首　　　為家

さてさてこれらの歌ども多くはこれのみにてよめるさまなれば
一三夏歌 云々霞とあれども霧とも云ふべし
虫をのべのむしの秋鹿とあるときは鹿の時雨を多くは
れ霧千鳥とあるときはこれは霧なれども時雨を多くは
とも云ふこれは霧とも云ふなり
ちとも云ふなり
霧自然喚乃元霧とあるなどは霧とも云ひ
よ霧の音霧とも云ひ
とひ入なるべきなり
と云つくりて
霧の花とも云ふ
霧の花とも云ふ
霧霞
霧自然喚乃元霧
野山

あられとはいつれをいふ歟
霧鹿
つれなきこの例
夕時雨
秋さらば夕の雨の村雲よ
白露千鳥
秋もよもすがらこれ
これに比して可知
よくよく可考
一字歌とは
一字歌とは雲霞露霧梅柳鶯月花雪
一京極黄門庭訓抄云一字歌と云ふ
ことしとは下句よりはじめて
ひとつとは歌の
ひとつとは歌の

春といふ題にて一字歌ハ法をよむにいひて題を下の句に云へ
しと云 法とよみてとハ花なくバ上の句に出す白雲ハ二字
ぞ川おひく常ハ鳴さてつる月ハ光 鈴鹿をさへかれの雪
ハ法つりのかきくるしめたすと云類しかれども上の句に法
まとって下の句にて儀に有花なし題をあらハしぬれバ
歌ゆかしくとてかく海とめよくくて和付これハ六字歌に
なぎくと結歌にも皆せんかいあるべきとし

一 近来風躰抄（後成字 良基公作）云 文字もおもくれくやさしくとある歌
とおよびやうありがたく讀なるべしとぞ云 文字もおもく
なくやさしくとある歌とハ一字歌などのやさしやさあ
るべきに讀とハ六字歌などと文字をおもく用ひれバ其歌に
よりあしくとなどもぶんに思ひめぐらしてさくさよいひ
なぐつせとらふことしことく八清輔朝臣の奇に家にと云

一字歌にて
これ姫なきしの玉の緒をよせて乱れりこと渡る白雲

○結題（むすびだい）と云事
此外一字歌のよむよみかたハ稽古ひありとぞ
ひとつび歌とハ六歌の文字三字四字五字などで
ある云ことバ初春霞 雪中子日たとへ家づれ歌と
これ初春に霞をひとつひて日に雪とひとつひろしきて
結歌乃文字の中に八雁字実字（ひよ ふくは）とぞありそれを
よくよめて讀べきせとふむ川りこれのし其結歌
乃讀やういかよんびべきぞといへバよくく其歌の五音
とらて讀ぞ思ふと所ど情ある八歌乃ふと字
或八か奇文ハなき作ハしくふよりて讀べしと近来風躰抄にも
とこら稽古に不意歌ハ此外の功者にあるべし

○題を三つら所讀事
是ハかの二字三字四字ある題を一所に出へて
およて下よりつらて讀べしとのぞし

一 京極黄門庭訓抄云二字三字より後ハ歌乃字を（かくさう）
三つら出べし結題を一所に出ことハ悉下のすらそ然るると
なやと云云用ひ出とハ上句下句にかてよむべしと云所に

寄とハあるもあるべし　和歌とあるべき事野寄とのハ法
の縁語と云ハさしたる歌の字と甲乙よりて上句よりひつ
くるとハ云ハさしたる
一阿仏尼伝ハ歌の文字と上句ハ落後ハ下句ハ云ハ
かきあつめたるなるべしとつけたるいとこゝろとこと
ばゆきあるハ山家外記云歌ハ上里入堀ハ上峡
る外記ハ後ハ歌ハ中ハ後ハ歌ハ山里入堀ハ上峡
くるもらんとこゝろ
いてかとして
山家外記云歌ハ
山家外記

後拾遺

歌ハ物五文字ハ要下記事　五りハ寄ハ寄といハ歌と
ゝりて物五の寄ハなと先ハ寄ハ歌ハ
ゝ

一京極中納言相語　定家卿作　云歌ハ初ハ句ハ上ハ後の句
ハ上ハ甚ハ
ゝ
物ハ句ハ
と歌ハ
ハ上ハ
の句ハ
物ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ

と五文字よみあつまるとも[illegible]

一八雲口伝作 [illegible] 云歌はよるなつかしうしてこそ百
よ法こころもとなくれど陸門院百首その歌なども八字づつよ
てあれはさあらんなるべし歌枕も多く法名八幡宮りはを
[illegible]ども但それもつねなしと法名歌を[illegible]の
ゆりに法名さん寄下ものべしとそこれもてこそ
されど歌枕なれてひさしとゆりよいひつらつてこそ
しつるとこそ云よはあるべきこと[illegible]ばオ二百よ
つてよ其歌ゆるるめやうよりせあり河そつくるうらた
せ物愛字まあるいはせるあること[illegible]ばべ

新古今　　後鳥羽院御

[illegible]文さうれん美はひとそよはるるこひのみつくしを

月　　同　　大宰大弐宣家

[illegible]はこれはひとひそあ[illegible]ことそれの年ぬ雪ふるるん

落花　　同　　雅経

[illegible]

○歌とまつはることと云事　　歌とまつはることと云事

よ其ゑんとつひまつ[illegible]をこ[illegible]二字三字に字五字の歌よあ
[illegible]也大方新有字はあるとべくむる用の字はまるとべ
新有字と八月日雨雲露雪方霞山岳野海川船柳松橋
萩萩菊紅葉雲氷麦寄郭公鹿なとの詠し用字
といとこはば尊卑侍必逢稀 陳義恩述言遠近遠幽思送
忘源流流水留[illegible]
一近来凡新云歌の文字とあ[illegible]
[illegible]べ[illegible]近くも為用ても法なをして

作りきしを云 歌をよむハ世を太平ならしめ人をしたがへ
ハ歌のみなるべし 落歌よりくるすりされと文字粗字多
くゝんめて中のハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
よむべきこと 此文字とハ別して

一和歌用意 云ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
つゝ[illegible]と興元太後ゝ心ハ[illegible]
又をし近しなと約乃字[illegible]
[illegible]
又日歌とハ[illegible]
さ[illegible]
遠乃字[illegible]
くのゝ可[illegible]
と云[illegible]
[illegible]

一收員物 基俊作 云歌をよむハ世を太平ならしめ人をしたがへ
歌も必後ゝ文字乃ゝ三字四字五字有
さて後ゝ文字乃ゝ[illegible]
ゝ[illegible]
して後ゝ[illegible]
[illegible]
我[illegible]
時[illegible]

雪歌 道之後

[illegible]

霞間遠樹

[illegible] 後拾遺

[illegible]

桜香襲袖

[illegible] 新古今

[illegible] 有家

靜見花　続古今　太上天皇
めくれせぬやとの桜乃ひさしきにちりてもさへそれはれきさ
めくれせぬまてもやとのあはさくも花にさそれは静のみ有

曙一人聞　白川殿七百首　常光太臣
ふるさと花乃ちるそ乃心とて雲井にまさるかれ

郭公早鳴　続後拾遺　為房
待人のなかに渡乃なのりそのなのつもいそねに緑かれ
なのりもいそねに早きとよりさせら

早苗多　同　為世
まつ女とるまてあまるさこにいそけとも山田のさなへ猶そつき夜
とりてあまるといひて猶そつきせぬとあまたあり

五月雨久　伏見院御製
なかめこし五月の日数かさなりにさやかなる月乃井にまた絶る
五月のひかりさへさかなりにとりかへあり

萬花浩秋　今案　深賢法師
暁まつらになりしる女郎花にそねしきし　あさ月さ八

いまねどもあらしに若んあり

二星適逢　家集　俊成
七夕の舟路さしもきらしなとつとせよひとよるかそら
一年に一よるかるといふに適逢ぬんあり

遠近秋風　玉葉　権中納言兼季
吹おくり外山にひゞく秋風に都の松もおとあはせなり
外山にひゞくまさ乃宇とりさせ都の松に近きんあり

寒庭露滋　新古今　基俊
庭乃面にしける蓬にことよせて心乃まゝにをけるしら露
蓬乃茂れと寒庭のさ次しんのまゝにとをる滋れあり

鹿聲両方　千載　覚延法師
宮きのゝ小萩か原を行程ハ鹿の声をさへ分てきくかれ
鹿の声をきゝわかて哀小といふに両方をそ鳴んあり

色葉艶　続古今　定家
吹風のやゝふかさこの八乃下八つり表紙八て吹ふ八乃やまくさ

やまと本の八の下ばかり露霜そおくと云ふ歌あり

○雲隔深

夕かすてハやへかさなりてくる山の端れかゝる瀧やみえもなしなん　玉葉　欽慶法師

夕ふさハやへかさなりてくる山といふ歌来深乃心あり

○雲隔遠山

ゆくへなき山又山をこえてみるかれくはりつゆさうれ　新続古今　前大納言親雅

つくは山も山よかゝ山又雲山の心ありおもふかれに露霜

○初恋

もかすりしらぬるに袖ぬれなくもや恋乃ゆかるなりなん　千秋　肥後

もかすらいつわらぬるといふ歌初の心あり

○忘久恋

人忘れぬるよ年ふる年月乃いのちとなれる袖そつれなき　続後撰　小宰相

人忘れぬるよ思ひありしよふるとも年月といふ歌久しき心あり

○見恋

うつしおきこれ浦乃葉の名よりかも深きえよハむなしかりそ　続古今　定家

ほかの浦の葉乃色とハかゝると云葉もかくと見ゆるより

なくしてよろしかるへし

○忍恋

しのひても袖にうき恋の涙乃ゆかぬれ乃色へ　新古今　意家

「こ袖の心ゆ袖ふかく年ふるも見ゆ人もあらしとかりは

「親やとよ袖乃色ふかくハとふへひさすせ袖さて家つと

いふこそ乃色より年月よ乃名月よなれり仍とこの

山袂の袖といふ歌ありけんとぞかりしあり

○誓恋

こくらのかさ人ハ人の偽をすてゝ誓ハあらこもらしみめ　新古今　同

こくさのかといひさ人ハ人の偽をなすといふあさらの歌

心あり誓とハいひの比ありけんなしと猶其もつことし

○待恋

とのりゝ偽なきぬ夕くれもありかと頼むよみさへおけぬる　玉葉　太宰相実泰

偽なきぬ夕ぐれもありかと頼といふ歌待心ありけり

雜恋

後千載　　源兼氏

うらやましさてもなほとは天川かすみ渡るこゝろ花ぞの

七夕の年に一度の契をよそへて婦人とり替せる

逐日恋　　千載　　後

色深くうつろふ乃間をうらめしきのふ乃袖はぬれにしものを

白家送年　　新古今　　藤原清輔

ことしとてくれまれにしかとのこしらとなりにしかな

入をのゝ初春をそくつまさきわつかに雪はなれ人今ハ

木をうゝて深山乃どくなれとしく年乃とまりをしる

くちはうゝ

遠鐘遠　　新勅撰　　入道三品親王

勅撰山あしの乃路のをとれはこゝろいとゝ

いとゝいとゝぬる遠ちかはうゝ

仏有住色　　新千載　　等寺院　　僧尼

一百寺やとゝ仏乃牧とゝろうゝぬちよのをとゝしなら

ゝ乃ゝぬ千世のをとゝいふ文字佳の字ありをとゝしなら有乃

字れんありひさゝひ不可勝年各准一可知也

影とゝハせて後事　　ゝハせて後とハ影とまりて後といふ文字内

しるし影乃ゝと同よいさぎよしてゝをゝいひしして

其物とゝハせとゝ也

一仮月ハ云その和乃もとゝ後れぬゝハ世ゝれなどアて

後べし世ゝれといふハゝとゝんとゝ地とゝゝ

ゝんしとゝゝ世ゝれとゝいふも内し

八雲口伝云影とゝくゝ伝ゝくゝ天象地儀植物

動物をべて其物ゝんゝ和をバその名と後べし三十一字

乃中ゝ影乃字と後ゝとハゝく是と紙ドゝゝ

とハせて後ゝゝもあり證歌後ゝ天象地儀植物動

物をべて其物ゝんゝ和とハおゝをゝし竹ゝ雲霧雨雪

山雪海川岩石紫電雷霆乃歌乃和ゝゝ和乃ゝ

ゝ千歌乃ゝゝひハ和ゝゝハして後ゝきゝされと又一

祈之如をて侍とはいふこゝろ證哥

落葉浮水　新古今　右京兆家

いくしほとなくてとくん水とはいふかりふくこゝろ稀乃あしもと

只今眼界之落葉乃浮ひくるとゝてこゝろもめけし

もてあそぶ人もあるこゝろ也いとゞ秋乃哀とこゝろ

土とはいふあるこゝろ也いとゞ秋乃哀とこゝろ

紫とゝのせこゝろ

月照水　新古今　右衛門督信

ゝもむ人もあるこゝろなきこゝろ紫とゝのし蓮乃葉のゝ行せて

義乃乃月乃入りこゝろまてとゝのせてとゝのこゝろ水とゝのせこゝろ

侍時鳥　五月四日寄合

青蓮之ゝ入りいてくなるゝとゝ人乃月のゝ侍ゝ稀とゝ侍せん

今年時ゝ乃ゝ乃ゝとゝのせこゝろ

一愚問答注　愚問後感之家　云歌乃文字とゝ〳〵ゝ生てゝむ

ゝ侍ゝ侍ゝいとゞ秋峯乃哀とゝ子祝之ゝとの花

蒲乃稀とゝ侍とゝんなど侍ゝ八歌乃文字なきこゝろ也

八ゝゝ〳〵祈ゝてゝ新ゝゝ稀とゝ侍ゝ侍例ゝゝゝゝ

ゝゝゝ侍例ゝゝゝゝ稀乃歌歌のゝ〳〵作例

ゝゝゝて侍ゝ時乃歌歌のゝ〳〵作例

花係山氣之　詩哥合　生家

ゝゝゝゝ同ゝ稀ゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ歌ゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

繡筵これ山乃詩也ゝゝゝゝゝゝゝゝ

一二句ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

紅葉流両　月吉哥合　円

ゝゝ侍ゝ用も歌もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

社のゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

紅葉　右大臣家百首　円

ゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たいつれも祈ありあるを初よりしてその初と思ふやうに見
ハくれよりのちぐさうて初ハゆゑくもまりぐきしし
歌とかゝるよゆづりて後るゝ　かゝるゆづりハ歌乃文字多くなるゆと
もかりゝくいひあるべきことをむりあるとこのちう
を惑ふなるゝわさどしき後ようてその後ようてよむ
といふべし
一近来凡祈えむもとび歌とバよハーてようむ一又ハかうな
ゝ
説をとりてようむづーとゝ　証哥　佐成心
條朝臣物憩　千秋
ちハきやちぐさ　ぢぬ〜ぐさうきつゆて百歌も同一九移せんとハ
條朝臣物とハいつ心ありんと物者ーてゝ歌をまろう
その朝さのぞんてようふ物者を考ーゝろんゝ五字
ともよ実字うてゝふ雑歌なるゝやをくゝとかゝる
ゆづりてゝゝあり　かゝるハむーあるゝ人女とゝいひるゝ
ゝふ女のいつやう車乃ちぐとりつ物ー百歌移ゝ心

ありぶべーと物者ーゝれバ男女のいつやううてれれ
歌まてゝうゝひてくゝゝ乃ちぐのとゝねゝりさて今一
ゝよなりりて男以歌ハありんと歌ゝつゝゝ歌ゝあり
てさゝゝゝといてきねゝてあぶゝなりぬれ條朝臣物
ゝゝか後ゝゝゝてゝ歌ゝゝりあつる玉妙ゝ

等思女人恋　家集　藤井法師

いのゝふ乃いくゝの川ゝもあハゝの浪りゝやゝひ女なん
等ゝ女人とゝゝ人ゝりあゝとゝいれもふあ行ゝゝ
ゝなりかゝ後ハむーつのゝゝあゝ女ゝ男ゝさり
あゝその男ゝんぞーいづれもひゝーゝりゝれバゝもん
れゝもゝひゝぞゝゝてゝひゝぞーゝ女の歌
乃ゝやゝゝゝバひゝゝゝ川ゝあゝあゝとゝりなぞ
ゝゝゝそゝのゝべーいゝてゝりんゝ女ゝまいりせんとゝ
ふゝゝゝ乃男ゝゝゝこひて女田川ゝのぞゝゝこれとい
ゝふひゝゝゝ乃ーゝゝとゝる今ひゝりハ尾のゝ

といふこゝろ女せんこゝろをくてゆきていくさ川と月とをなほさり
なれバはなのこゝろの男も同しくさとしつゆこゝろ」大和物語
よみしこゝろはなほ流れ恋なれハ九用のゆれこゝろ
歌とは寿ゆゑづくて流る　これもおのゝ流ゆゑづくて流と同し
んはなこゝろ見又とはのもとさし證哥

待恋　　家集　　定家卿

ひゝ　ひとゝきこゝろとゝ小萩ゆゑ文ゝハこゝろ白つゆ
なほ古今集　こゝやきのゝなかゝの小萩ゆゑとゝもこれと待こゝ見と待て
　　生家卿　待んはこゝとこれと待こゝ見ゝとゝ
　　いゝ待の字とは待こゝ　ゝこゝこゝ

歌とは寿歌とゝきこゝ　　寿歌とゝこゝハ寿の花鳥の月も
ゝ寿歌のおなこゝれど花の歌ゝひゝひて月とゝ花月の歌
ゝて八花ハこゝ月ゝ月ゝ　　ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
歌ゝて八月とゝ　　ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
いゝんなゝ八月ゝ月ゝ歌とゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

おゝとゝこゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
いゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝて八月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
八月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
ゝゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

御判　後京極殿　太きなるとむかしのことや定かにならんとは
る歌のかゝる上へバ名バかり旅にてとゞくべくやしきは是
飛の歌と但まで名ハかり夜ころりふ実景しいり
かも飛のゝかうらかりてうりしありべきし文

新樹

六百番歌合

春夜をもとりしきなからなくして秋そめなくんきて由りし也
判　俊成卿　太政新樹とバ不実して秋をあくんそ苦
りしきといひてをかくやとき之是新樹乃ことりある
と実景をそへて秋のまことりなるゆりしきしいへる
ふ実景なるとまでや又実景も地よまかべきことしてしる六
秋夕ハ物かなしくさてきとりしと云んとそいとうつきやされ
いふし無実景ゆゑれと秋夕ハかくいふかもとし各其躰に
よりて結ふべし一概に定差べからざるなりとぞ
まくバ是乃歌にて是と上句にいへど下句にハ
色白なきし旅乃泊なとゞとりてその物とはゆるやうに
述べきしあるを上句ハかりに歌といひそて下句に其よ

歌のゆかりとなるなり

せれく又ハ歌と結句かさりに出でと定句にハそのよしせれ
きと歌ゆかりとそ婦かましく又結歌ならバ歌と上下に
まくバりてより合よく可続し形くろく歌と物並りし
につらまとやうしきものといへる流にまされ

歌と上下にもとる事

一和寿用意に云又歌乃やうにまさりひて歌乃文字とハ上
下にもとるなくりしくらふくしとは上下にもとろしくハさとら六
まさ山鄙なれといひきと上句に鄙有と出て下句にさまの事れ
をといふやうのまことれハくるしからぬと

雑歌のこと

雑歌とハ結歌乃さまにむつりしき歌也［愚問賢註］陳朗愛編
愚問賢注　愚人恋なとのやれし文宗家に於て川百首乃歌末也
一和寿庭訓おもいふにも未練乃程ハ自比練しなるもひとすゞる
歌よそ述べきとうしよるなりくれ人まづハしき歌のさまやさしく
とりつきがらきいうかもこころべきにまで作りく世歌か
どハちくくらあれて後今ハしおもちしむけ又後雪あらべく
雑歌なとゞとてがあるしてハふ可作んとはれ是初心乃

往ハ孤歌なりとハ後ぐうどがうとつのりてハ又雖歌を
ふくなりとへでハあるべうもとなり

経文乃歌の事

一 若問賢注云〻 依花経乃歌れと乃ゑ後やうハ只んとかへき
ゑ又初そ後ゑも仏例ありゑ巻ゑとりてゑぐ
ゑもんも初ゑうゑそへ後んもりのゑくゑーうゑ仏
例 ゆゑゑゑ んとりてでゑゑゑ後とハ経文乃ゑゑ
ゑゑゑゑゑ物ゑもゑゑゑゑゑて後ゑゑ初ゑゑゑてゑへ
ゑむゑハ経文の初ゑゑりて物ゑゑゑゑへてゑむゑー
法華経序ゑ

廣度諸衆生其数無有量

ゑゑゑゑゑ教もうゑゑぬゑー往いうゑゑそゑうゑひうゑひゑゑ後
ゑれハゑゑばゑゑうゑゑて仏ゑゑゑ

同隨喜功德ゑ　最後第五十周二偈隨喜

谷川乃なゑれの事と仏人もゑくハんゑくハゑゑーありゑゑ
ゑれハ慈童ゑゑ事乃菊とい字ゑ世乃字ゑゑゑゑ
ゑゑゑーく何ゑうゑゑゑうゑ

同安示行ゑ　深入禅定見十方仏ゑ
ゑゑ何ゑなゑゑ後ゑとゑゑて入ぬれハゑゑなゑぬハゑゑとゑゑゑゑ
同譬喩ゑ　其中衆生悉是我子
ゑハゑーごゑゑなゑ歌ゑゑ世ゑゑゑゑ法ゑ乃ありゑゑりゑと
ゑれハゑゑとゑゑて物ゑもゑゑゑゑゑゑゑゑ後ゑゑり
ゑゑ等ゑゑそゑ消ーゑゑ

傳歌の事

一 若問賢注云傳歌とゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑもゑゑ歌乃ゑゑと後ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
十ゑゑゑゑゑゑゑゑれハゑゑのゑゑゑゑゑゑ三十ゑ五
歌乃ゑんゑんゑゑ歌ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑんゑゑゑれゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
中ゑ傳歌ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

ろやうのとせそれも柳二三分桜七八分頃よめるハ柳ハあ
しらひ物にて傳説にハなし又桜四分柳六分頃によめ
るハ傳説の證拠 次にあつらふ又一六拠 牧ようじ中にお
に桜乃説あるを文貫乃説に桜とよむとそへさるとらふ有り
されどこれハ三そ五そなとの中よりやうにめる数いで
三十そ五十そになりぬれバこれもよろしからむとことて
とよ去の説に春秋の説に考家なとのくさひハ別
てゐるき物にてこれとよそにおいてハ三十そ五十そしへよ
こつゐあげさなれバいさてくるしからぬそとしこれ恩罪
往乃説し

一円任七夕七首に天川とよみてと説に天川とよむを
くるしかるべからずとてこれハおよめるごとく三ヶ所
なれ共に八傳説にしまさるべしといへども七夕七首なとを
へよとはかに八天川しまる何首にてもくるしかるまじと
いふなく定家卿七夕七首になかく天川と五りよを

とは後の家なありけるの例なるべしさて一その中
外傳説作例

一定家卿御詠之長短百首の中侍春月
去年の名残乃影かなる有り月侍宮乃むめ乃香くさ物
是ハ去後乃梅を流むる家にそて人近代ハ羽家ハなさぐらうに
優よく天説乃あるべきやうとんぬるに家乃中しくし出給
んべしさとてゐんぐらう乃作るべき事なりそて民アん
又更兀来門尉家内条れと作られらんぜられに出めきぬ外
記文之馬允めされて物のくびをのりてもちさ戸より出そ
らんハんのはるべきやうの侍去月一よ桜梅なとぐらのぞ見
人るとや世文云今記くびよのりとへさとく山乃説に流試
侍ぐ出ぜ花の説に帰り出集なとしるらくし新とらふ
説に新く流新家なと引りあられんとと文にそこらりある
べきとてぞこれ去月ハそへ梅にありて桜梅の路とな
てもこれハ傳説し文

六百番歌合　秋歌

あしたれと公宣卿の子鹿の袖八千くさの秋ぬるしらす
判　後鳥羽院　なを　かれぬ　ぬれぬ　袖のぬれるも鹿の袖よりてそ
すしぬれ　鹿の歌　なを　ぬれ　袖　鹿のうへにぬれ　侍歌　なりけるとも
これも　なを　ぬれ　袖　鹿の歌

一　光明峯寺摂政家百合　寄蘭恋

うらうへ　衣　うらうへ　袖　ぬれ　なし　とも
判　定家卿　侍歌の衣さへうらうへなしとも
八雲御抄　侍歌の歌　ぬぎ　袖　物を　袖入と　袖　一連　恋の侍歌
のごとし　ぬぎ　袖　物　袖入　袖　一連　恋の侍歌
もあ　ぬ　袖　恋の歌　袖　物　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖
の事　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖
てとあ　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖
ちうと　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖
よ侍　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖
そゆ　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖　袖

片歌の事

一　歌枕　片歌病とて　片歌病　細川幽斎自筆本侍
　　佚方宗祇抄　云　片歌とは　云　とへば物の
　　川と侍　物　二と侍　物　一と　物　一と　物　一と　物
　　物二と侍　物　一と　物　一と　物　一と　物　一と　物
　　て　物　と　物　と　物　と　物　と　物　と　物　と　物

落歌の事

　　歌の、京和と侍　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
　　かと　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
　　なて　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
一　八雲御抄　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
　　て用　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
　　亭　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
　　なと　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
　　とハ　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
　　ささ　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
　　れり　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
一　耳底記　細川幽斎自筆本侍　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌
　　鳥丸光広卿抄　云　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌　歌

おりろく洗れぬ訓ありそれをつゝく案を労して切なる
ふるゝこそそれい何でゝこそうつくしくなりてそくらよき
なり連奇なるもつゝ仏あるごとく出候 社の門て
などいおりろく洗れぬ訓也とこゝ云

奇ド実字乃事

訓乃文字の多ある中よりもむべきなりこゝは
でもつる文字あり必ずもむべき文字と実字といふし
一八雲口伝之訓の字をなれども必しも字毎に洗入すべき
もあり此訓よハ何の字こゝ洗入てあるべきとこゝろ
可洗入し字毎に洗入すべきもありとこゝ云 字毎に洗入
すべきもありとべくとゝバ季陽巳閑といふ訓ハむつ
くゆゆれど書ゝ乃ゝ云て如何く二字適逢と云訓
ハ七夕の年に一度あふこゝ云て如何南律欲盡とあるゝ也
秋乃ゝとゝあハ安和遠し又字毎に洗入すべきとハ池の
中水に過不逢意依恋法恋 條鄭 多物 恋等思ふ金
此訓ふ可洗入
実字之数大略

実字の仮ゝとゝ

○出 ○雁出谷 ○紅葉出垣之数也
雁出谷 歌集 訓法
えなき谷乃ゝ雁ゝ出ゝ谷乃ゝ春と云ゝ
和紙出垣 後撰 雅世

○入
秋雁入雲 百首 乃堅
秋ゝ雁ゝ入雲ゝ乃ゝ
山月入簾 歌集 道定法
ゝ月乃ゝ入簾ゝ

未 ○秋来開 ○電来深之数也
秋来開 月 月
春雨ゝ花ゝ開ゝ位ゝ逢ゝ
電来深 歌集 訓意
ゝ雨ゝ深ゝ

○傷　○秋夕傷心。見月傷老之類し

秋夕傷心　千そ　作兼

ものとてなしとふしむかふ地ハおりしかなる浪こ旅ゆ[illegible]

見月傷老　お季　拾

老くしの公もまゝ世の[illegible]とあハれ[illegible]

○厭　○被厭恵之類し

被厭恵　拾集　法勝寺後

人ものとてなしとふ[illegible]我なしめ煙もとりもとりけ[illegible]

○到　○野径到暮之類し

野径到暮　千そ　作兼

のこられる表よりのおくられて家路日もとくの人乃ゆくれ

○何　○秋花何在○吠鐘何寺之類し

秋花何在　家集　清物

白うとよまるひ[illegible]花や秋ものこるの[illegible]

吠鐘何寺　千そ　作兼

○怠　○怠早苗○怠別恋之類し

怠早苗　白川殿七百首　行家

[illegible]

怠別恋　拾集　法勝寺後

[illegible]

○遥　○帰厂遥○遥生郭公之類し

帰厂遥　れ　長清

[illegible]

遥生郭公　続後拾遺　後鳥羽院

[illegible]

○恥　○花恥老之類し

花恥老　新　業雅

[illegible]

○掃　○風掃落花之類し

風掃落花　同　宮内卿成助

まんいまさせよとて我つゆる花さへ風乃なかそさきそふらむ

○晴　○晴天帰厂。五月雨晴之歌

晴天帰厂　家集　慈鎮

こしの山雲路乃雪ハ晴れのこるとふかるかの法多

五月雨晴　同　逍遥院

月のこる雲深くもあかる五月雨のあか晴やへくも晴る法川へ

○物　○物花。○物悪 之歌

物花　玉葉　為実右近大夫

大空乃花のさかりも程もなし庭乃一本ハさこそあるらめ

物悪　続古今　雅経

今ふちやんまんを待つ咲るくもあらぬそて乃しるらせ

○早　○茉花早 之歌

茉花早　続集　後柏原院

深と知らぬくさ八内しむなるらむく咲きそめしら川乃へ

○似　○卯花似月 之歌

卯花似月　新古今　白河院

卯花乃むら〳〵咲るかきねハ雲まよる月乃影かとそみる

○白　○桜白 之歌

とりなへて花の匂ひも深きよの枕ならへし桜乃下かせ

○径　○落花妨径 之歌

落花妨径　家集　慈鎮

咲初て松ならる落葉ハ秋のおもかけふかくなれり

○隔　○霧隔遠樹。○隔夜郭公 之歌

霧隔遠樹　続古今　定家

さつ波よりくれぬ磯乃松乃はもうくめく霧むくれる

隔夜郭公　同　実白

ひくれねとまたきまりせハ子規二声ともきかぬことやかたらまし

○遠　○遠山郭公。遠夕雲 之歌

遠山郭公　家集　正徹

きしさり霧るれるをまつ郭公いつかそ乃山路やま

遠夕雲　玉葉　九条左大臣女

夕立の十帝そ過る雲乃下まふりとぬ雨そよをそとゆく

○笛　○松香笛社。水笛水聲之歟し

松香笛社　新古今　有家

あはれ分ひらうと松むしりとやそてよそろうせそしく

水笛水聲　後拾今　中納言

冬ごもりたの山乃谷水八高ふもさそ聞志のゝん

○解　○氷解之歟し

氷解　新拾　雅親

うゝ世川砂八と分川嶺をれ乃ひも始ゝ春乃を川ら砂

○共　○共偽恵之歟し

共偽恵　百首　道家卿

人八いとゝうゝひをゝきうゝとも牧むとなもとそとうを牧き

○近　○近荻。近恵之歟し

近荻　白川家七百首　茂氏

うゝ祝乃荻八の姿ゝせとゝゝて松よなゝて在乃かきゝ

近恵　拾集　後拾遺

そゝゝゝゝも又なゝゝゝ中恋ゝ乃ゝと牧ゝゝ

○契　○契恵之歟し

契恵　新後撰　法中定家

さなゝゝて八牧め和ゝと偽乃ゝゝよ地人乃なゝゝゝなゝゝゝ

○散　○雪散凡之歟し

雪散凡　拾集　後拾遺

うゝゝ乃もとのゝ松ゝゝ雪や凡乃やゝゝ乃松とゝゝん

○誓　○誓恵之歟し

誓恵　千載　俊頼大夫

うゝゝ八後乃ゝと祈もゝあゝ川ゝ雪乃後ゝゝとゝ分ゝ人

○両　○鹿声女方。両方恵之歟し

鹿声両方　求集　雅経

なゝゝ乃後世ゝゝゝゝゝ八ゝゝ後世ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

両方恵　新後拾今　家長

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○遅　○去月遅之歟し

春日遊　　夜集　　遊仙窟

○送　○花下送春之歌

花下送日　　定家

木の下にかくれ居て春をおしむとて花をさそふ乃そ

○逐　○逐春花盛之歌

逐日花盛　　同　　永源法師

きのふまでもかくれる花なれはあすの今日のいとゝしく社やれ

○忘　○花忘老　○忘憂之歌

花忘老　　夜集　　仙源

さてはこゝの老らくはあれぬとはいとゝ忘るゝ物なりけれ

忘憂　　新後撰　　為氏

しれはやはこゝろ乱れてしはしはこゝろ晴れもの後新もゝゝ祢ハ

○別　○別憂之歌

別憂　　新勅撰　　法下　赤清

○終　○宣旨終歌　○終天恨之歌

宣旨終歌　　定家

ゆふ風乃やとふこのハ乃下ハゝう雨まてぬ庭乃ゆふ雨

終恨憂　　後成々

○弁　○折弁書之歌

折弁書　　故為

花とゝもとゝてとのれ的ゆく青柳乃枝ゝ乃ゝ千世風哉

○畜　○書斉畜　○畜斉之歌

春斉畜　　拾集　　後拾遺

つゝゝ乃新ゝゝそゝ乃れ書も牧能ひそ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

畜斉　　夜集　　遊仙窟

ゝゝて住ん乃乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

○花　○折花宅之歌

外記義宅　千載

○依　○依恋之部

依恋　俊頼朝臣集

○帰　○帰谷之部

寄帰谷　新撰和歌

谷川よりの流れの花分てねとのれるかせをうゑひとそ恋

○裏　○裏恋之部

裏恋　新拾遺　西行

○兼　○兼厳恋恋之部

兼厳恋恋　千載　師兼

○雑　○冬歌雑恋之部

冬歌雑恋　円

○依　○依花侍恋　○依恋侍恋之部

依花侍恋　金葉　円実房

依恋恋恋　新古今　石清

○乃　○乃花　○乃恋之部

乃花　新古今　定家

乃恋　新古今　義孝

○雑　○乃雑家之部

乃雑家　俊頼朝臣集

○対　○対水待月之歌　今宗　長俊

対水待月

交乃我の月待花のてらさひて出りる毛れ我むきひつ

○適　○適逢恋之歌　新　小侍従

適逢恋

それとこそ思ひ寄ることなれてこゝろを

○柳　○柳恋歌　拾集　後拾遺

柳恋歌

流れとも我の袖にかゝりひくあとやさいはせ

○玉　○玉恋之歌　赤集　道々慶

玉恋歌

たゝくやくれて人のそと同しこの夕すらも

○遠　○遠偽恋之歌　後古今　公実

遠偽恋

家とそ人のいつもあくらひてきり数てとはさるをくさと

○深　○寄深恋之歌　左忠方合　後八幡

寄深恋歌

白雪の袖にふるとはいつれなるあくのあくこゝろ

○添　○恋添之色　拾集　後拾遺

恋添之色

春乃之花の色ハ匂ひ色ハ深くとも人ハ心を

○連　○連峯恋　○序　連雲之歌　同

連峯恋

つくしの松乃春のこゝろ山ハ家人とてる我乃ごのものもの

○積　○積雪之歌　同　後拾遺

積雪

ふるとも人ハ雪のこゝろ山ハ家人とてる我乃ごのものもの

○告　○鶯告春之歌　新勅　後拾

鶯告春

春ハ人ハ雪のこゝろ山ハ家人とてる我乃ごのものもの

稜雪　　紫式部

○播　○播磨之歌

播磨　　千載　　法華

○韋　○韋史

韋史　　千載　　月清

○中　○中之歌

中之歌　　新拾　　光吉

○長　○秋夜長之歌

秋夜長　　玉葉集　　東塵

○駕　○駕則之歌

駕則　　同　　通俊卿

○牧　○牧色減之歌

牧色減　　拾遺裏　　通俊

○慰　○花慰之歌

花慰　　拾集　　拾遺愚草

○鹿　○御鹿之歌

御鹿　　千載　　師兼

○歌　○歌無名恵

歌無名恵　　玉葉集　　拾遺

○室　侍郭公室明　同　西行

子規なくなる時分なるものあるべきこと也

○群　雲満群山　新撰今　紀貫之

つくづくとなるまで山ぶくるもれくつるらゆき

○結　柳結落花　新　花宴左大臣

春雨の柳の糸ゆひとられてあるかの門をなほ白ひかるる

○恨　恨恋之部　俊成撰

恨恋

しるべしとたのみしかひもなかりけるなほうらめしきは

○内　年内立春　新勅撰　後鳥羽院

○浮　秋浮水　山集　後鳥羽院

秋の水にうつりて月の影はかりの紅葉ばかりの多

○写　秋写水　同　後鳥羽院

秋の水にうつりて月の影はかりの紅葉ばかりの多

○移　秋移神　同　道家

秋移神之部

○埋　落花埋路　千載　俊頼

落花埋路之部

○栽　栽花　後拾遺　定頼

栽花之部

○疎 ○疎惡之類し

疎惡 歌集 [illegible]

○失 ○失誤する惡之類し

失誤する惡 同 [illegible]

○疑 ○疑惡之類し

疑惡 新後撰 [illegible]

○[illegible] ○[illegible]之類し

[illegible]水 後拾遺 [illegible]

○動 ○[illegible]之類し

[illegible]動野花 歌集 後撰

○[illegible] ○[illegible]之類し

[illegible]月 歌集 [illegible]

○[illegible] ○[illegible]之類し

[illegible]雪 後拾遺 [illegible]

○[illegible] ○[illegible]之類し

[illegible]池水 [illegible] [illegible]

○[illegible] ○[illegible]之類し

[illegible]千年 [illegible]集

○延 ○[illegible]之類し

[illegible]延齡 歌 [illegible]

○思　○思恋之歌　千載

○蕎　○雲雀啼之歌　拾集　後拾遺

雲雀啼

○鶯　○莢鶯之歌　拾遺　後拾遺

莢鶯

○多　○早苗多之歌　拾遺　後拾遺　本歌

早苗多

○惜　○惜花之歌　拾集　後撰

惜花

○重　○芍花重之歌　拾集　牧歌

芍花露重

○折　○折花之歌　拾遺　新後撰　石大臣

折花

○梅　○梅花之歌　玉葉　院三位実長

梅花

○潮　○花潮盛之歌　同　前大僧正慈鎮

花潮盛

○易　○花易散之歌　新千載　後法三宝院入道前大臣

花易散

○破　○風破浪夏　風破浪夢　夏集　信高卿

○侍　○侍花侍臣之歌　侍花　後千載　藤原家

侍慈　新古今　武二門院王

○毎　○毎秋牧川之歌　毎秋牧川　乾　源通

○涙　涙恋　涙恋　遠光信

○稀　○寄稀　○稀恋之歌　寄稀　同　同

稀恋　後千載　源兼氏

○文　○文花之歌　文花　千尋　為尹

○弥　○花勝ち舞之歌　花勝ち舞　乾　藤原定家

○真　○田家秋真之歌　田家秋真　新勅撰　宗通

○源　源秋去月　○源山橘之歌　源秋去月

源教長卿　続古今
たれを待ちかねてなくこゑにあはれは秋の夜ぞまさりける　お宮内大臣
源公親　金葉　拾遺九大臣
○松　松風年　続古今　長谷雲院大臣
○松風年之歌し
位山のさしぬきつゝみ神さびてそのかせもたゝぬ松のあるかな
○古　○古柳之歌し　道さ院　新集
古柳
ふりゆくかたちいくそのの人のかゝとなるこゝろ青柳の糸
○舊　○舊恋之歌し
舊恋　同　枕河
さりかねをたのもしかりしひとのこゝろ
○如　○如花如月之歌し　新古今　源乙波
如花如月

○紙　○紙之歌し　新後撰　藤家
紙上鶴
鳥の羽の雲のとりつる旅人とまつとしらるゝ月のかげ
○龍　○龍之歌し　俳諧
龍
雲の龍遠樹
ゆりつゝ花の雪ふかれ雲よりとりつる秋のちりそう
○滝　○滝紫泉雨　同　同
滝紫泉雨
ながめやりつゝこれとのこそひつゝこのゆふの雲と滝の泉水　後拾遺集
○滑　○滑冠得衣之歌し
滑
秋の秋ふきのゝ人も居乃袖てあるゝ人むの袖の露かな
○擇　擇衣紫之歌し　宇治お大政大臣
擇
擇衣紫
いつれとゝ人をこれてあるゝてあるとゝらてうれ

○照　○月照草木之類し

月照草木　千載　友則朝臣

後撰集

○明　○明月之類し

明月　拾集　後拾遺

○逢　○逢恋之類し

逢恋　新後拾遺　法皇長講

○流　○涙流之類し

涙流　拾集　後拾遺

○遍　○子規遍之類し

子規遍　新後撰遺　拾遺雲雀

○顕　○顕恋之類し

顕恋　新後拾遺　称名院

○宮　○宮月之類し

宮月　拾遺　月

○盛　○盛花之類し

盛花　永法院尼　為家

○瞿麦夾氷之類し

夾氷　瞿麦　拾遺　源付西

○拾遺雲雀之類し

拾遺雲雀　家集

○妨　○彩材妨舟之類し

彩材妨舟　千そ　俳諧集

みてくれよ舟のくまとてくらし程の新こまもつぬ友永吉の孔

○竹　○竹魚之類し

竹魚　新後撰　有教

名のみこそたをの滝もそこもあこやそこそ雅ふるさとのうは

○消　○水消之類し

水消　歌集　公儀

手乃よの人乃公そとちこと表けとやりハ毛ぐうまむ世ハく

○廻　○猪舟廻之類し

猪舟廻　同　遺老説

ふ山やしぬ世ハ河海乃ひめくりてゆうみ世ハ

○見　○見魚之類し

見恵　後古今　今上

ひとハあさ乃宿と見やうけこなるうあ我て乃ゆくん

○法　○花法山川之類し

吉野川宗ゆさくゆ呼ゆうゆくゆ花乃ちく雲

○絃　○素琴絃之類し

素琴絃　新　雅世

さ波くのくの乃琴ゆけゆきくハ雲くの絃りてくろ絃ゆ

○俳　○野俳霞之類し

野俳霞　風雅　九波陵

夕つくひ雲ひもとゆ世ゆ人の花乃とろこゆ言風ちふく

○静　○静思花之類し

静思花　後古今　たゝ天宮

められとゆ宗乃ゆくられなくう乗ゆくハくられ抜れき

○花　○花俳風之類し

花俳風　歌集　新拾

さくひ乃ゆ宗ハくりや抜なちるをきうれとなとハくるく華

悪恋　新古今　左大臣宮

我恋は枝の下葉よりもえそめてもとの心をよそにやは

○和　○帰て忘れの恋の歌し　玉葉　資季

帰て忘れ

古今　人くちの行らんくさの時を見れば　そのうつかは

○源　○夏草流の歌し　夏集　通方卿

夏草流

あしかるかは麻もとりていかんところの中ちみ義より

○頻　○鄙の恋の歌し　千載　雅経

鄙の頻

青柴乃はりの歌　歌　歌　歌　歌　歌

○映　○霧映日の歌し　千載　雅経

霧映日

もえ立の狩下焼となり夕日の歌

久　○久恋の歌し

久恋　新古今　大上天皇

○独　○独り時雨の歌し

独り時雨　続古今　法皇

独り時雨の初時雨乃初時雨乃初時雨乃初時雨

○不　○不逢恋の歌し　新古今　為秋朝臣

不逢恋

いつとなく次焼の人乃名ひさしく久しかりしかな

○欲　○欲別恋の歌し　新千載　為秀

欲別恋

ゆくあとの夕つゆ乃初しぐれ

○夕　○夕立の歌し　万葉集　後拾遺

夕立

日乃もとの文字乃くぬ花乃上の白ものこゝろ乃花

○透　○篝火透簾の歌し

嘗火遠寄集　巻集　並録

初学くわしからぬ人のため新まなびされ乃ともがらのため
あらはすなり此乃実字ハ必よみたる文字也或ハ詞のあしらひハ
てもよし又ハ一字乃文字として読むとも云ふてもよし
き文字と八此數をよく可心懸者也

虚字乃部

虚字といふハ文字のみ八出たるまゝにて不可読文字也

○外　○野外 野外霞之類也　○戸外 戸外稀之類也　○天外 天外極殊之類也

右外之字何れの所までも附て不読文字也

○邊　○海邊 海邊秋之類也　○水邊 水邊霞之類也　○池邊 池邊鶴之類也　○川邊 川邊花之類也　○江邊 江邊雲之類也　○橋邊 橋邊月之類也

右邊之字ある所あまたありといへどもいづれもおなじ乃心にて不読文字也

○上　○湖上 湖上月之類也　○池上 池上花之類也　○河上 河上雪之類也　○江上 江上月之類也

右上之字何れも邊乃字におなじ

○天　○暁天 暁天落花之類也

右暁天といふ所天の字ハ皆虚字也其外天とある所ハ実字也よく心得べし

○文　○暁文 暁文秋之類也　○深文 深文月之類也

右暁文ハ暁とよむ八字ハ和遠深文ハ深秋の心にて可讀

○陽　○雲陽 雲陽月之類也　○草陽 草陽露之類也

右雲陽ハ雲草陽ハ草と讀ハ和陽の字なし

已上実字虚字とも少雖可讀猶外ニ甚多略之

実字のこゝろハ此等ニて可心得之虚実ハ不及沙汰ニ也